



茨城県立医療大学 広報誌
IBARAKI PREFECTURAL UNIVERSITY OF HEALTH SCIENCES

IPUHS

vol.013
2026/03

通信

茨城県立医療大学は二〇二五年に
開学三十周年を迎えました





30周年 記念式典を 挙 行

一ともに踏み出す新たな一歩

本学は2025年5月28日、開学30周年を迎えたことを記念し、記念式典・記念講演会を開催いたしました。当日は卒業生、地域の皆さま、関係機関の方々など、多くの方にご参集いただき、これまでの歩みを振り返るとともに、未来への展望を共有する一日となりました。

■午前：30周年記念式典

式典では、学長挨拶に続き、これまで本学の教育に尽力いただいた方々へ知事感謝状および学長感謝状が贈呈されました。スライド紹介では、これまでの本学の歩みを振り返るとともに、在学生の将来の夢や、大学の魅力などが語られ、会場から大きな拍手が送られました。

知事感謝状 授与者

- 学長等経験者
 - 永田 博司様
 - 工藤 典雄様
 - 松村 明様
 - 市村 久美子様
- 運営協議会委員（任期6年以上）
 - 田宮 菜奈子様
 - 吉武 博通様
 - 横田 由美子様

学長感謝状 授与者

- 大学運営協議会委員
 - 新井 一様
 - 細川 知正様

■午後：記念講演会

記念講演会では、車いすバスケットボール女子日本代表ヘッドコーチとして活躍される添田智恵氏を講師に迎え、「スポーツの力で繋がる未来」をテーマにご講演いただきました。

■30周年記念誌の発行

本学の沿革や、これまで本学を支えてくださった多くの皆様からのお声をまとめ、30周年記念誌を作成いたしました。本学ホームページにて公開しております。ぜひご覧ください。



■開学30周年記念事業寄付金へのご支援に御礼申し上げます

2,071,020円

30周年事業の一環として実施した記念募金には、卒業生、在学生保護者、地域の皆さまをはじめ、多くの方々から温かいご支援を賜りました。

お寄せいただいた浄財は、学生の学びを支える教育環境の整備や、地域連携活動の充実に活用させていただきます。心より御礼申し上げます。



■ロゴマークのデザインコンセプト

大学ロゴマークをベースに、「30」の文字と、前進する車いすをデザインしました。そのまわりを彩る茨城県の花・バラには、県章をイメージした青色を使用しました。青いバラには「夢をかなえる」という花言葉があります。

■ロゴマーク作成に込められた思い

30周年記念事業のメインテーマ「地域とともに30年！さあ次のステージへ」から、これからの新たな30年間も
●茨城県をはじめ、地域社会で暮らす人々の健康と幸福を支える有能な人材を輩出し続ける
●医療職を志す学生たちに寄り添いながら夢の実現を力強く支援し、ともに成長していくという二つの決意が込められています。



「やっぱり、医療大。」を未来につなげる

―学生と教職員が共に描く、ビジョンの形―

全学SDFD研修を通して考える「これからの茨城県立医療大学」とは

本学では、事務職員を対象にした管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のための組織的な取り組み（SD：Staff Development/スタッフ・ディベロップメント）と、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組み（FD：Faculty Development/ファカルティ・ディベロップメント）を一体として実施し、大学運営の向上を目指しています。今回の研修では、教職員だけではなく学生も参加し、大学の将来像や果たすべき役割について、立場や職種を越えて大学全体で考える機会となりました。

■大学スローガン「やっぱり、医療大。」とは

開学30周年の節目として、茨城県立医療大のスローガンを策定いたしました。

「やっぱり、医療大。」  茨城県立医療大学
IBARAKI PREFECTURAL UNIVERSITY OF HEALTH SCIENCES

■「やっぱり、医療大。」と評価してもらえる医療専門職を育成します。

茨城県立医療大学は、質の高い保健医療の教育・研究・実践を通じて、地域社会に貢献し、学生・教職員・卒業生・地域の人々にとって人生の大切なよりどころとなることを目指します。“藝に遊ぶ”の教えに基づき、実践力のある医療人の育成および、地域とのつながりを重視した全人的医療教育を提供します。また、医療大といえば茨城県立医療大学といわれるような、唯一無二の大学を目指し、地域で生活するすべての人々から「やっぱり、医療大。」と感じてもらえる大学を築いていきます。

■全学SDFD研修概要

実施日：2025年10月27日(月)
会場：茨城県立医療大学
参加者：本学教職員、学生 105名
テーマ：

「やっぱり、医療大。」を未来につなげる ―学生と教職員が共に描く、ビジョンの形―

- 基調講演
- 外部講師による講演
- グループワーク・意見交換



基調講演

研修の冒頭では、阿部学長・桜井内部質保証委員長・橋企企画戦略室長から、大学が直面する社会環境や、本学の現状や取り組むべき課題、スローガン策定の想いや背景、本学建学の理念を確認し、今後目指す姿について基調講演を行いました。

- 「本学の目指す未来。」 阿部慎司学長
- 「第二期アクションプランの進捗状況」 内部質保証委員会・桜井直美教授
- 「やっぱり、医療大。」に込めた思い」 企画戦略室・橋香織准教授



阿部慎司学長



内部質保証委員会：桜井直美教授



企画戦略室：橋香織准教授

外部講師講演

午後は、茨城ロボッツ・スポーツエンターテインメント代表取締役社長 川崎篤之氏を講師に迎え、「つないでつくる未来―茨城ロボッツ流、借り物共創のデザイン―」をテーマにご講演いただきました。

本学と茨城ロボッツは2024年に連携協定を締結し、学生の学びの機会を広げるとともに、地域活性化を目指した取り組みをスタートさせました。講演では、茨城ロボッツの地域で果たす役割、大切にしていることを通じて、理念を行動に移していくプロセスや、組織としての意識改革の重要性について語られました。



川崎篤之社長

グループワーク

当日の研修では、学生・教職員が混成のグループに分かれて意見を交わしました。

研修を通して見えてきたこと

「やっぱり、医療大。」を実現して行くうえで、大学スローガンをいかに自分事化し、今後どのように行動するかについて落とし込む作業を学生、教職員が合同で行いました。今回の研修を通じて、教職員一人ひとりが大学の未来を支える当事者であるという意識を共有できたことは、大きな成果の一つです。多様な意見や課題が挙がるなかで、「部署を越えた連携の重要性」「学生や地域の声をより積極的に取り入れる姿勢」など、今後に向けた共通の視点も見えてきました。

今後に向けて

本学では、今回の研修で得られた気づきや意見を、今後の大学運営や教育・研究活動に生かしていきます。教職員が真剣に語り合い、学び続ける姿勢こそが、大学の未来を形づくる原動力です。これからも社会と向き合いながら、より良い大学を目指した取り組みを進めてまいります。



パラスポーツ推進支援室始動



私たちは、茨城県立医療大学を舞台に、地域に根差したパラスポーツ活動の推進と支援を行うべく、2025年度からパラスポーツ推進支援室を立ち上げました。

茨城県立医療大学という場を活用し、そこで学ぶ学生達やそこから巣立った卒業生達、近隣の医療機関の皆様やパラスポーツ推進支援に関わる各種団体の皆様、全ての県民の皆様とともに、パラスポーツの花をあちこちに咲かせていきたいと思ひます。

スポーツをする人、見る人、支える人。
色々な関わり方があります。

このページが、あなたにとっての新しい人生の扉になることを願って。
皆様の最初の一步をサポートいたします。是非お気軽にご参加ください。

茨城県立医療大学パラスポーツ推進支援室
室長 橘 香織

パラスポーツ推進支援室の理念

1. ミッション：パラスポーツ推進支援室の使命

パラスポーツ、特に車いすスポーツに関連した活動の推進支援を通じて、地域社会において広く活躍できる人材を育成するとともに、茨城、そして日本の各種パラスポーツの普及振興および競技力向上に寄与します

2. 2030ビジョン：パラスポーツ×医療大だからできること

- ①パラスポーツを茨城に根づかせていくために、選手や指導者、ボランティア等の活動参加者をサポートする拠点となる
- ②在学中から卒業後も参加できる教育研修プログラムを通して、高い専門性を有した人材を輩出する土壌となる
- ③パラスポーツ分野での教育・研究の発展に寄与するために、情報収集と共有、調査分析、研究支援の機能を備える

3. アクション：キーワード

“地域と社会への貢献”、“人材の育成”、“教育・研究”



■主な取り組み

車いすバスケット等のパラスポーツ体験イベントの開催

①プロ選手による車いすテニス体験会

2025年6月27日実施

【講師】

荒井大輔プロ(パリパラリンピック男子シングルス・ダブルス出場)

齋田悟司プロ(パラリンピック6回出場、国枝選手とのダブルスで金メダル2個獲得)

参加者：学生15名、卒業生2名、教員5名



②台湾・高雄医科大学短期留学生に対する車いすバスケット体験会

2025年7月15日実施

参加者：留学生12名、学生1名、卒業生1名、教員2名

③パラスポーツ体験会の実施

4月29日：車いす遊び研修&体験会(参加者：一般14名、学生1名、卒業生6名、病院職員2名)

5月18日：車いすバドミントン

(参加者：一般25名、外部講師1名、卒業生3名、ボランティアスタッフ2名)

6月15日：モルック(参加者：一般7名、卒業生3名、ボランティアスタッフ1名)

車いすバスケット選手による記念講演(開学30周年記念事業)

添田智恵氏(2000年シドニーパラリンピック銅メダリスト・現女子車いすバスケットボール日本代表ヘッドコーチ)による講演会

パラスポーツ選手の活動サポート

本学体育館を活用して、車いすバスケットボール女子強化指定選手の強化トレーニングを実施(4月：1回・のべ5名、5月：3回・のべ6名、6月：2回・のべ2名、7月：3回・のべ12名)

車いすバスケットボール教室の実施

4月～7月にかけて、地域在住障害児者を対象とした車いすバスケットボール教室を計6回実施(参加者：一般のべ269名)



車いす遊び



車いすバドミントン



モルック

パラスポーツ推進支援室のメンバーである人間科学センター 井田博史教授が令和7年9月26日に急逝されました。多大なご貢献に深く感謝を表するとともに、つつしんでお悔やみを申し上げます。先生の高い専門性と熱意は、本企画にとってかけがえのないものでした。心よりご冥福をお祈りいたします。



第5回たんぽぽプロジェクトを2025年9月12-13日に開催

初めて海外の大学生(台湾高雄医学大学)が参加
第5回までで110名の大学生、12名の社会人が参加
第6回を2026年3月に開催準備中

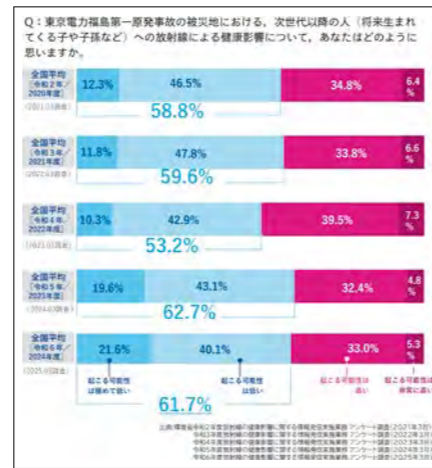


今の“フクシマ”と放射線の正しい理解を広める —たんぽぽプロジェクト— 専門職教育から社会と向き合う。

放射線をめぐる「認識のギャップ」

福島第一原子力発電所事故による被ばくについて、「次世代以降に健康被害が生じる可能性が高い」と考えている人は、約4割にのぼるとされています。一方で、放射線の影響に関する国連科学委員会の2020/2021年報告書によると、その可能性は低いとする結果が示されています。

こうした数字が示すのは、科学的知見と社会の受け止め方との間に、いまだ大きな隔たりが存在しているという現実です。放射線に対する不安や誤解、そこから生じる差別や偏見は、時間の経過とともに自然に解消されるものではありません。



震災から15年

東日本大震災と原子力災害から15年が経過しようとする現在、福島県浜通り地域では、インフラ整備や帰還政策が進められてきました。しかしその一方で、人口減少や地域コミュニティの分断、放射線への不安や風評被害、さらには復興再生土壌の受け入れ先が全国的に定まらない現状など、多くの課題が今なお残されています。

「復興」という言葉が使われる場面は増えていますが、その進捗や課題の現れ方は地域ごとに大きく異なり、真の意味での復興には、長い時間と継続的な関わりが必要とされています。また、放射線や原子力をめぐる問題は、人々の記憶や関心から静かに遠ざかりつつあるのも事実です。

協力大学、企業、医療施設、団体等

放射線関連企業 1社
TECHNOL 千代田テクノリ

関連団体 4団体
放射線技術者協会
放射線技術者協会
放射線技術者協会
放射線技術者協会

参加大学 9校 110名
茨城県立医療大学
福島県立医科大学
北海道大学
国際医療福祉大学
東京大学
慶応義塾大学
九州大学
高徳大学

福島の「いま」と向き合う

本学で実施している「たんぽぽプロジェクト」は、こうした現状に対し、専門職教育の立場から改めて向き合うことを目的とした教育プログラムです。主に診療放射線技師を目指す学生や医療系学生を対象に、福島の「いま」を現地で学ぶフィールドワークとして実施しています。

これまでに計5回開催され、参加した大学生は延べ100名を超えました。今年度は、海外協定校である台湾・高雄医学大学から2名の学生が初めて参加し、国や文化の違いを越えて、放射線と社会の関係について共に考える貴重な機会となりました。

現地で学ぶ

本プロジェクトの特徴は、放射線に関する知識や法規、規制の枠組みを座学で学ぶだけでなく、実際に被災地を訪れ、地域の方々の声に耳を傾け、現場を自分の目で見ることを重視している点にあります。

正解を与える学びではなく、複雑で一筋縄ではいかない課題に対して、「自ら考え続ける力」を育てることが、この活動の大きな特徴です。

診療放射線技師に求められる視点

診療放射線技師は、医療現場で放射線を安全に扱う専門職であると同時に、患者や社会が抱く不安や疑問に向き合う役割も担っています。

放射線を「危険か、安全か」という単純な二分法で捉えるのではなく、科学的根拠と社会的背景の双方を踏まえて考える視点が不可欠です。また、福島で顕在化した課題は、決して一地域に限られたものではなく、エネルギー政策や環境問題、リスクの受け止め方など、日本社会全体が共有する課題であることを理解する必要があります。

今の“フクシマ”を見て、聴いて、感じて、測って、学んで、考えて、判断する旅
たんぽぽプロジェクト
茨城県立医療大学保健医療学部放射線技術科学科
五月女 康作

たんぽぽの約束
Tampopo Project

若い世代(ライフイベントを迎える世代)から若い世代へ放射線の基礎知識を有し、“今の福島”を伝える人材育成
放射線エヴァンジェリスト(伝道師)



学生たちに生まれる変化

たんぽぽプロジェクトに参加した学生からは、「福島」や「放射線」に対する見方が変化し、自ら情報を調べ、周囲と対話しようとする姿勢が生まれていることが報告されています。

福島というフィールドで得られる学びは、知識の習得にとどまらず、将来、医療専門職として社会課題と誠実に向き合うための確かな土台となっています。

未来へつなぐ学びとして

震災や原子力災害は、過去の出来事ではなく、今なお続く課題です。たんぽぽプロジェクトは、今後も年2回のペースを目標に、可能な限り継続して実施していく予定です。

本学の学生が積極的に参加し、他大学や海外からの参加者との交流を通じて、多様な視点に触れながら、放射線と社会の問題について考え続けてほしいと考えています。

答えを示す活動ではありませんが、「知ることをやめない」「考え続ける」「自分で判断する」という姿勢を次世代へ手渡すことを目指し、本学の教育と社会貢献をつなぐ実践として、今後もこの取り組みを発展させていきます。

●プロジェクト責任者:
放射線技術科学科 教授 五月女 康作先生

専門は「放射線科学」「磁気共鳴画像(MRI)」「ドラマ・映画化した漫画「ラジエーションハウス(©横幕智裕・モリタ英社)」「グランドジャンプ連載中)の企画・医療監修もやっています。

藝游會

Alumni Association

同窓会「藝游會」の活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝いたします。2025年7月6日に、出席者9名にて定期総会を開催いたしました。議事録は同窓会報「藝游vol.26」に掲載予定となっております。

◆第10回（2024年度）卒業生交流セミナーの開催報告

2024年度の卒業生交流セミナーは、理学療法学科が担当し、水上昌文教授に「再生医療時代の脊髄損傷の理学療法」というテーマでご講演いただきました。参加者は延べ26名となりました。講演終了後に藝游會より、感謝と先生のご健康を祈念し、記念品を贈呈いたしました。水上先生、ありがとうございました。



◆第11回（2025年度）卒業生交流セミナーの開催について

2026年3月7日（土）に「第11回卒業生交流セミナー」を実施します。本セミナーは、「医療大学で育まれた看護の心—世代をこえて語り合うこれまでとこれから—」をテーマに、吉良（黒木）淳子先生、山口忍先生、高村祐子先生、富田美加先生を講師としてお迎えし、講演およびパネルディスカッションを通して、世代を越えた学びと交流を目的としています。

当日の講演内容等の詳細につきましては、あらためてご報告いたします。

今後も、卒業生の皆さまにとって有意義な学びと交流の機会となる企画を継続して実施してまいります。

◆会報「藝游vol.25」の公開

会報「藝游」は大学ホームページからご覧になれます。「藝游vol.23」より、誰でもアクセスできるようパスワードなしでの公開となりました。クラス幹事が工夫を凝らし、クラスページを作成いただきました。ご協力有難うございます。卒業生だけでなく在学生にとっても興味深い内容となっておりますので、QRコードよりアクセスし、是非ご覧ください。



◆寄付事業「つなげよう！ IPUHS支援基金プロジェクト！」

在学生の経済的影響に関する支援「つなげよう！ IPUHS支援基金プロジェクト」では皆様よりご支援いただいた寄付金を今後も在学生への様々な支援に活用していく予定です。引き続きご協力賜りますよう、お願い申し上げます。

お問い合わせ

E-mail: geiyukaigrad@ipu.ac.jp (藝游會事務局)
会長 橋 香織 (PT1期生) 茨城県立医療大学理学療法学科准教授

キャリア支援センター

2025年度の活動報告

お問い合わせ
及び就職相談
申込先

茨城県立医療大学キャリア支援センター
Tel. 029-840-2109 E-mail: career@ipu.ac.jp
業務時間：8:30～17:15（土日、祝日を除く）

採用試験の早期化が進む中、個々の学生に応じた個別支援や就職ガイダンスの企画を実施しました。また、学科別就職セミナーの開催の他、マナー講座や病院見学バスツアーを開催しました。

◆学科別就職セミナー

看護学科、理学療法学科、作業療法学科、放射線技術科学科、各学科の採用時期に合わせて就職セミナーを開催しました。採用試験の早い看護学科は3年生の夏に開催しました。直接現場で働く医療従事者の方や卒業生とお話できる機会は、学生にとって大変刺激になった様子でした。各医療機関や卒業生の御協力に感謝申し上げます。



◆マナー講座

外部講師をお招きし、基本的な接客や就職にも活用できるマナーについて学ぶ機会を提供しました。お辞儀の仕方や立ち居振る舞い、表情の大切さを細かく御指導いただきました。



◆病院見学バスツアー

今年度はコロナ前と同様に年3回病院見学バスツアーを実施しました。1回目は県央地域（県立こころの医療センター、県立中央病院、県立こども病院）、2回目は県南地域（つくばセントラル病院、総合病院土浦協同病院、小美玉市医療センター）へ伺いました。計50名の学生が参加し、「施設ごとに特徴を詳しく知ることができる貴重な経験です」等の感想がありました。3回目は県西地域（結城病院、茨城県西部メディカルセンター）へ伺う予定です。今後も低学年の学生も参加できる企画を実施してまいります。



茨城県立医療大学 NEWS & INFORMATION

2025年度新規着任・昇任教員

笹原 朋代	4月1日着任（教授 看護学科）	膳法 浩史	9月1日着任（准教授 人間科学センター）
五月女 康作	4月1日着任（教授 放射線技術科学科）	曾我部 和美	9月1日着任（講師 放射線技術科学科）
瓜倉 厚志	4月1日着任（教授 放射線技術科学科）	平沢 伸広	9月1日着任（講師 付属病院）
山口 雅之	4月1日着任（教授 医科学センター）	渡辺 詩絵奈	10月1日着任（講師 付属病院）
濱田 理人	4月1日着任（教授 医科学センター）	岸本 浩	9月1日昇任（教授 付属病院）
大坂 佳子	4月1日着任（講師 医科学センター）	唯根 弘	2月1日昇任（准教授 作業療法学科）
花田 洸一	4月1日着任（助教 放射線技術科学科）		

2025年度定年退職教員定年退職教員



理学療法学科 教授
水上 昌文

1997年4月、開学3年目を迎えたタイミングで講師として着任し、それから29年間無我夢中でその時になすべきことに全力で取り組んで来ました。研究面では、研究室のメンバーでもある病院PT諸氏や筑波大と共同で、HALの臨床研究・治験に取り組んだ事が最も印象深く残っています。大学運営面では学務副委員長と病院理学療法科長の併任、学科長、研究科長、副学長、学

～長い間、本当にありがとうございました～

長特別補佐と分不相応な立場も多くの教職員に支えられ、何とか勤め上げることが出来ました。この度私はここを去りますが、茨城県立医療大学は「永久に不滅です」。皆様の益々のご活躍をお祈りいたします。



2025年度海外招聘講演会を開催

2025年9月10日に、「令和7年度海外招聘講演会」を開催しました。

今年度は、ウエスタン・シドニー大学（オーストラリア）Jane Frost教授をお招きし、「学習効果を最大化するシミュレーションの力」をテーマにご講演いただきました。

また、対面式の講演会はコロナ禍以降初の開催となりました。

Frost教授は、看護や健康教育の分野の研究に携わられており、特にテクノロジーやシミュレーションを駆使した革新的な教育方法については国際的な評価を得ています。

冒頭、Frost教授がシミュレーション教育に使用する疑似患者用のマスクをつけて登場し、会場内は大変驚かされました。

講演では、シミュレーションが看護および医療教育をどのように支援するかについてお話いただき、ウエスタン・シドニー大学で導入されているシミュレーション教育の概要や、その利点として、安全な環境で意思決定やチームワークを練習できるということをご説明いただきました。

また、講演以外にも、学内見学や意見交換も行われ、本学にとって大変学びの深い機会となりました。



Coffee Break

最近、娘の“いやいや期”に振り回されながら、なぜか自分の生き方を整えられている気がしています。娘は2歳。いわゆる“いやいや期”まっただ中です。毎日の保育園への送り迎えが、ちょっとしたイベントになります。「行かない」「靴が違う」「自分でやる」。さっきまでご機嫌だったのに、急にだめになることもあります。こちらの予定や段取りはあっさりひっくり返り、“大人の正論”はほとんど通じません。押せば押すほど動かないことも多くて、そんなとき私はようやく気づきます。「進める」より先に、「落ち着く」が必要な場面があるのだな、と。

一方で、落ち着いているときの娘は、驚くほど世界に誠実です。私たちには見慣れた景色でも、目に入ったものすべてに反応して、指をさしながら次々に名前を呼びます。バス、雲、葉っぱ、飛行機。ひとつひとつを確かめるように言葉にして、表情はキラキラしています。大人にとっては“ただ通るだけの道”が、娘にとっては発見の連続になっている。そこに少し付き合っていると、さっきまで焦っていた気持ちがあふと緩む瞬間があります。

予定通りに進めることばかりを優先せず、少し立ち止まって呼吸を整えるだけで、見えるものが変わる。娘に振り回されながら、娘に整えられている。そんな日々を、もうしばらく味わっていこうと思います。

放射線技術科学科 助教 高橋 将斗



卒業生の方へ

卒業生との交流会等の企画・開催、大学情報を発信するため、勤務先や住所に変更があった時は、必ず電話又は書面もしくは本学ホームページに掲載している「卒業生連絡先等調査」入力フォーム (<https://www.ipu.ac.jp/mailform.php?code=5>) により、お知らせください。



開学30周年記念 揮毫について

記念式典の立て看板は、作業療法学科3年 横沢実樹さんが作成しました。

横沢さんは書道パフォーマンス甲子園全国優勝経験者で、様々な書体を書くことができます。今回の看板には、お祝い事に使われる書体を書いていただきました。

茨城県立医療大学 IPUHS通信 vol. 013

発行月：2026年3月

発行：茨城県立医療大学

問合せ先：茨城県立医療大学

〒300-0394

茨城県阿見町阿見4669番地の2

Tel. 029-888-4000

Fax. 029-840-2301

本誌は年1回発行しております。

本誌に対するご意見ご要望を是非お聞かせください。

✉ shomu@ipu.ac.jp



茨城県立医療大学公式Webサイト

<https://www.ipu.ac.jp/>

茨城県立医療大学 広報 X (旧Twitter)

X [@ipuhs_publicity](https://twitter.com/ipuhs_publicity)



茨城県立医療大学 広報 Instagram

Instagram [@ipuhs_publicity](https://www.instagram.com/ipuhs_publicity)